

338

特277-742



*76W10681 *

特277

742

贖價

發行所
燈台社



始



か。それは、一人なるイエスを以て、人類即ちアダムの子孫を買い取るために必要なる価値を支拂はしめたる事によつて置かれたのである。此の「買價」はアダムの子孫を其の被監禁状態より解放するものに有効なる価値であつた。

人類を買い取るには如何なる価値を必要とするか。それは、一個の完全なる人間の生命そのものを必要とする。神の律法は「生命を以て生命を償へ」(申命記十九章二二節)と指定してゐる。アダムが神の律法を意識して犯した時、彼は一個の完全なる人間であつた。而して神の律法は、此の罪に対する償ひとして此の完全なる人間アダム之死を要求してゐた。(創世記二章十七節)。アダムの子孫を買い取り得る価値は、一個の完全なる人間の生命であつて、これ以上のもの、又は之以下のもものでは其の用をなさないのである。天使の生命を以て人類を買い取る価値は使用することは出来ぬ。何故なれば、天使は人間よりも本質上一位即ち大人であるからである。又アダムの子孫は全部は罪を遺傳せる事によつて悉くが不完全なる罪人であるが故に一人として此の必要なる「価値」を提供

する事内出まもない。(詩篇四十九篇七節)。全人類は不完全なるが故に唯極めて短時間の間地上に生き、後には皆死んで行く。而して若し神が彼等のために何等か生命を得るの道を開く下さらぬ限り、彼等の全部は永久に死滅して了ふのである。然らば人間を死より解放しその生命への救のため如何なる事が既に行はれたであらうか。

此の質問に対して聖書は斯く答ふ。「唯われは天使を少し少しく劣らざれし者即ち死の苦しみを受けしは、其の死に於ては神の恩によりて、全ての人の代り死を味はんが爲なり」(ヘブル書二章九節)。イエスは常に神の聖意を行はれた。故にイエスが「天使を少し少しく劣らざれし人間、即ち天使よりも下位なる人間となつて、死の苦しみを受け、その恥辱的の死を受け、死する最後まで神アダムに對する忠信を立證し、その死によつて人間を死より救ふために必要なる買價を備ふる事は、神アダムと愛子イエスとの間に豫め諒解済みであつたに相違ない。神の愛子の原名は「ロコス」と呼んだ。

而して「ロコス」は其の最初から神アダムと偕にあり、神の指揮下に神の御目的を遂行した。「ロコスは神アダムに代辯者であつた。此の「ロコス」は一個の靈者であつた。一人の死は全能の神アダムに奇蹟的力によつて「娘」、人の子イエスを生んだ。(マタイ傳二章十八、廿三節)。此の「子」は「その最初より」(ヨハネ傳一章一、三節)。彼の「その最初より」神アダムと偕にあり、萬物は此の「ロコス」の代行によつて創造された(聖書は明示してゐる。(ヨハネ傳一章一、三節))。

人間の救のため其の基礎が置かれる時が到るまで。そして神は此の「ロコス」を以て一個の人間として生れしめられた。「ロコス」は肉體となりて我等の間に寄れり。われら其の榮光を見るに、眞の父の生み給へる神子の榮光にして、恩寵と眞理にて満ちり」(ヨハネ傳一章十、十四節)。「然れども時既に至るに及びて神は其の子を遣はし給へり。彼は女より生れ、律法の下に生れたり」(ガラテヤ書四章四節)。「幼少は、漸々に成長して、健やかになり、智慧を満ち、かつ神の恵み其の上にあき」(改訂ルカ傳二章四十節)。

人イエスは三十歳に達したる時に「己が全部を以て神アダムに獻身し、神の聖意をなす事を契約した。そしてイエスはヨルダン河に於てバプテスマを受ける事によつて此の全的獻身を表明した。(ルカ傳三章二一、二二節。詩篇四十篇七、八節。マタイ傳三章十六節)。其の時、イエスは一個の完全なる人間として、罪人を買い取るに必要なる資格の全部を具備してゐた。此の人間イエスが死すべき事に就て彼と其の父なる神アダムとの間に豫め諒解があつたであらうか。

之に就て斯く記さる。「父われを知る如く、我も父を知る。我は羊のために生命を棄てん。我は父の命を棄つるが故なり。我は父の命を棄つるの權能あり。再よ之を得るの權能あり。我が父より我の命令を受けたり」(ヨハネ傳十章十七、十八節)。

此の「ロコス」が人間イエスとして生れて、敵の無実の誹謗を受け、その苦難と試練の中に於て神に對する貞節を固く保ち、一個の罪人として死し、之によつて神に對する忠誠を立證し

訳聖書に於ても同様である。

上記テモテ前書二章六節の「贖價」(改訳) 試みあるギリシヤ原字は *antilytron* であつて、此の原字が聖書中に使用してあるのは此の如くのみである。此の字は「一の生命を贖ふために他の生命を以てする」場合に使用される「贖價」そのものを意味してゐる。即ち「彼は己を贖へて、全ての人(神が救はんとし給ふ所の人)第一節)の贖價となり給へり」(改訳テモテ前書二章六節)の「贖價」がそれである。之はアダム自身に贖價を以てするといふ事を意味するに非ずして、曾つて一度完全なる人アダムが己の意識的不従順によりて禁せられたる所のその生命権が、アダムの子孫のために買ひ戻されたと言ふを意味してゐる。アダムの子孫はアダムの子孫の故に、アダムの子孫の全生命権を阻止されてゐた。アダムの子孫中、彼等を買ひ取るために神が設け給へる方法を受け容れ、之に關して神の定め給ひし方則に進んで一致する者のみが、此の贖價の利益に與ふことが出来る。イエスは己自身の

生命の血を以て、アダムの子孫の上記救はる者のために生命権を贖はれた。即ちその生命権を買ひ取られたのである。神は全ての人が此の眞理の知識を得て、神の設け給へる示變の方則に一致して此の恩恵に浴せん事を欲し給ふのである。ヨナクする行善き事をして我等の救ひ主なる神の御意に遵ふことなり。神は凡ての人の救ひ給へ、公平なる神アハバの備へ給ひし此の贖價を受け容れる事によつて、眞理を悟る(即ち彼等が斷えず正しき道に歩むことを得るために)に至らん事を欲し給ふ。それ神は唯一なり。また神と人との間の中保も唯一にして、人なるキリスト・イエスは是なり。彼は己を贖へて、全ての人の贖價となり給へり。時々は譯せらる(改訳テモテ前書二章三・六節)。神は此の御恵み御歩き準備を人間の救ひのために設け給ふた。而して使徒パウロに之に附加して言ふ、*我は之がための立てりて宣傳者となり、使徒となりり」と。*

人イエスは、父なる神アハバの聖意に服して、己が完全なる人間としての生命権を一の「價値」に變じた。而して此の「價値」が、アダム

の罪によつて禁じられたる生命権即ちアダムの子孫の全生命権が有する事の出来なかつた生命権を買ひ戻す「贖價」となつたのである。之はアダム自身が買ひ戻されたといふ訳ではなくして、唯アダムが曾つて有し居たりし權利の全部が買ひ戻されたといふ事を意味してゐるのである。イエスを此の地上に遣はしてアダム自身に永遠に死せしめ、之によつてアダムと其の子孫の全部の永久の生命を得せしむるといふが如きはエホバの聖意ではなかつた。人イエスは一個の人間としてその生命を自ら棄てた。即ち、イエス自身が「我が父を救ふために我を棄す」とはわれ再び生命を得んがために生命を棄するが故なり……我が父より我、此の命令を發行たり(ヨハネ傳十章十七、十八)と聲明せる如く、後に再び其の生命を取戻したのである。イエスは己が生命即ち生存状態を再び取得したが、然しそれ以後再び一人の間としてではなくして、一個の靈者としてであつた。それと同時にイエスは一個の人間としての生命権を棄せしめられた。何故なればイエスの人間としての生命権は禁じられてゐるが

つたからである。神アハバはイエスを靈者として死より甦らし給ふた。そしてイエスは一個の人間として生命権を所有してゐた。此の「價値」は神アハバの求め給ふ價格として神に支拂つたものであるが、之によつてイエスは、アダムの子孫中アダムの如くに意識的罪を犯さずして此の贖價の價値を喜び受け容れる者の所有主となつたのである。然る後にイエスは、アダムの子孫を罪と死の囚はれから解放即ち救ひ出す事が出来た。彼等はアダムの子孫として生命権を禁せられた。此の罪と死の中囚はれたのであつた。此の事は即ち此の贖價の犠牲はアダムの子孫中の此の獨有資格者の利益となるを以て有効となるのであつて、此の「有資格者」とは即ち神の方則に服従して歩む者等を意味してゐるのである。例へばアベルは一個の有資格者としてエホバの御承認を受けしたが、然し此の贖價がイエスによつて支拂はれて、それがエホバに受納されるまでは生命権を受取る事が出来なかつた。此の贖價の支拂はれる迄が以前に

殺害されれば彼は、神が彼を死より甦らして此の贖價の利益を全的に受けしめ給ふ御豫定の時
至るまでは死の状態で待つてゐなければならぬか
た。イエスキリストがその完全なる人間としての生命
の價値を支拂ひ、アダムの失ひし所の彼の生命權
を買ひ取つた時は、イエスは人類中の服従者の所
有主となつた。イエスは其の死によつてアダムの
の身替りとなつたのではなくして、唯アダムが失
つた所の生命權と同價格のものを支拂ふ事
によつてアダムの子孫を買取つたのである。此
の故に人イエスが自ら棄れてゐる彼の生命は、
完全なる人アダムの生命に匹敵する同等價
格の價値であつた。イエスはアダムの子孫の有
資格者のために生命權を買ひ取つた。そして神
エホバの聖意の一致して之等の者に生命を
與ふることはイエス御自身の有する特權であ
る。永久の生命は、我等の主イエスキリスト
を通じて賜ふ神よりの賜物である(ロマ書六
章廿三節)。然らばアダムの子孫中の有資格
者を決定し得る者は誰か。それは神エホバよ
り此の事に就ての全權威を受けたる主イエ
スキリスト御自身である。キリスト・イエスは永

遠の父に即ち「生命の授與者」である。(ヘブライ書
九章六節)。主イエスは一の父として、神エホバ
の聖意の一致して死者を生命の状態で復活
せしめ、多くの者に生命を授くる權能と權威
を保有し給ふ。イエスは此の生命を、アダムの
罪のために其の生命權を失ひたる者のみに、而
して之等の一人々の中でエホバの設け給ふ方則
に服従して歩む者のみに與へ給ふ。

「全ての一人」
イエスの贖價は地上全人類に対する永久の益
となるのではないか。上記テモテ前書二章六節の
聖句は、イエスは全人類のために其の生命を贖
價として與へたと示してゐるのでないか。此の事
は全人類が此の贖價の恩恵に浴し得る保證
となる事を示してゐるのではないか。否、否、断
じて然らず。斯かる結論は絶対的誤つてゐる。
アダムの子孫なる人類の或る者は意識的の
悪人である。而して斯かる者は此の贖價の恩
恵に浴することは出来ない。若し彼等が此の
贖價に関する神の方則に一致して歩むならば
その時に彼等は義人となるを得て、贖價の利
益を受けることが出来る。之に就てイエスは、

斯く告げ給ふは此の汝(エホバ)我に賜ひし所の
者にわれ永久の生命を與へんがため、全ての者
を治むる權威を我に賜ひされけり。永久の生
命とは、唯独りの眞の神なる汝と、其の遣はし
しイエスキリストを知るこれなり(ヨハネ十七、二三)
神と主イエスキリストを知る事を拒絶する者
は生命を受けざる事が出来ぬ。多くの人は此
の眞理が示され、人々の救のため設けられある
神エホバの御準備が示されたるに拘らず此の
眞理を拒絶して言ふ、「自分は全然興味な
し。自分は今のままで充分に満足してゐる」と。
アダム自身生命を受くべき理由はない。何故な
らば彼は意識的の罪人であるからである。それ
と共に又、人間の生命を與ふるために神が設け
給ひし御準備を聽く事を故意に拒絶するア
ダムの子孫の中のある者が生命を受くべき理
由も絶無である。若し神エホバがアダムに対し
ても贖價の恩恵を與へらるる事となる、それ
はアダムの上に下されたるエホバの審判が正当
でなかつたと云ふ事を意味す。一方聖書は明示
す、「正義は神の寶座の基である」(詩篇八十
九篇十四節)。神の此の御準備を排斥拒絶す

るアダムの子孫に此の贖價の恩恵を與ふる事
は、聖書の中にも明示されある神の御目的に全
く矛盾することとなる。上記テモテ前書二章三
六節の聖句は、「神は偏らざる者」(使徒行傳十
章廿四節)に在り、事を示してゐる。故に此の贖
價は、神の聖意即ち律法に服従する全部の人
人のみのために益となるのである。其処にはエ
ホバと呼び奉る唯一の全能の神在り。又此
の神と人間との間には人イエスキリストと云ふ唯一の中
保あり、而して此のイエスキリストは「全ての人の爲
に己が生命を與へてその贖價となした」といふ
事は、即ち此の「全ての一人」とは神の設け給
ひし方則に一致服従する者のみを意味してゐ
る事か勿論である。此の贖價が全人類に対し
て自働的に恩恵を與ふると教ふる聖句は聖書
の中にも絶無である。

「買ふ」、「買ひ取れり」。若し「贖ふ」と訳され
あるこのギリシヤ原文は agorazo である。
此の字は agora より轉化したものである。あつて
之は「市場」を意味し、又其の同種語の agorai
「集める」と云ふ事の意味である。故に、此の

agorazoの字は、その天國の意義に於て、
「市場に行き、賣り物を買ふ」といふ事である。
その一例を擧げて見ると、昔、奴隷は市場に
於て賣買された。agorazoの字は此の事に
正しく該当してゐるのである。此の字の使用さ
れてゐる好適な実例は之がある。即ち「また、
天國は畑に隠れたる寶の如し。人見出さば之
を秘し、喜び歸り、其の所有物を悉く賣りて
其の畑を買ふなり」(マタイ傳十三章四十四節)。

多くの人は此の「畑」の字を解釈して之
は悪人其の他の全部を含む全人類を免徴
すると主張した。斯かる主張は絶対に誤つて
ゐる。此の聖句が、また天國は……云々と
あるに注意すべきである。此處に持ち出された
のは天國そのものである。地上全人類が此の天
國の中へ含まれてゐるのは確實である。又此
の「天國」が罪ある人類の中へ隠されてゐない
事も確實である。「天國」は隠れたる寶である。
それが此處に持ち出されてゐるのである。之は絶対
に聖なる神の宇宙的大組織制度の中にある寶で
ある。「天國」は隠れたる寶と我である。(エペソ書
一章廿一廿三節。五章世二節)。「此の言は歴代歴

關係なくして、イエスは此の苦しみによつて服従す
る事を学び、神に対する己が貞節と忠誠を立證
する事を得て、永遠の救と神の國の嗣子となり
給ふたのである。(ヘブル書五章八、九節)。

同じ此の agorazo をギリシヤ語は次の所
にも「買ふ」と訳されてゐる。即ち「また天國は、良
き眞珠を求めんとする商人の如し。一の價高き
眞珠を見出さば、其の所有物を悉く賣りて、之
を買ふなり」(マタイ傳十三章四十五、四十六節)。之
は上記同章の第四十三、四十四節に示されある所
の譬と同意義である。之等兩種の譬はキリス
トの「體」の成員を包括す。何故なれば彼等
は「天國」の一部を形成するものであるからであ
る。若し上記諸聖句中の神の國に關する
「賣買」が贖價に關するものであるならば、キ
リストの「體」の成員は之に全く無關係であ
る。何故なれば彼等は人類を買取る事に就て
は如何なる部分にも絶対無關係であるからであ
る。キリストの「體」の之等成員が神の國即
ち天國に參與することに就ては一点の疑ひな
き所である。(ロマ書八章十六、十七節。黙示録一
章六節。廿章四節)。キリスト・イエスの御跡を

代隠れたる寶と我なりしが、今其の聖徒に顯はれ
たり」(コロサイ書一章廿六節)。キリスト・イエスは、
父なる神の聖意に全的の服従をなして、全部
のものを嗣子となられた。此の「全部」の中は
此の「隠れたる寶」即ち「天國」が含まれて
ゐる。(ヘブル書一章二節。ロマ書八章十六、十七節)
神はイエスに其の御目的を示して、イエスが一
の首都制度即ち神の政府なる「天國」を有す
べき事を明らかにされた。此の「天國」は「歴代
歴代隠れたる寶」にして、神は之を顯示
すべき御豫定の時到来するまでは何者に対しても此
の事を絶対の秘密として隠し置きて給ふた。イエス
は此の事を学び知つた時、その有するものの全
部を賣り捐つて、之の嗣子となり、御國の首
となつた。天國を買ひ取つたのは、人類のため
の贖價として與へたイエスの人間性生命との
ものではなからず、それはイエスが神エホバの聖
前にあつた絶対無條件の信服即ち最大圧
迫下に於て神に立證せるイエスの貞節と忠
誠、恥辱的死を受くるに至るまで固く持續
せる忠節そのものである。イエスの苦
しめは人類のための贖價とてのもものは何等の

忠実に追隨して、神の國即ち天國の一部と
れたる者等は、彼等が御國の一部となる道を
歩み出す前に先づ初めにキリスト・イエスの貴
き血によつて買ひ取られたのである。(ヘテロ前書
一章十八、十九節)。「汝等の身は、汝等が神より
受けたる汝等のうちに在る聖靈の宮にして、汝等
は汝等のものに非ざる事を知らざるか。それは汝等
は價を以て買はれたるものなればなり。此の故に
神のものなる汝等は身に於て神の榮光を現
はすべし」(コリント前書六章十九、廿節)。因みに此
の聖句の「靈魂」に於ても、は不正の神入句にして
原文には無い。(改訳を見よ)。此の聖句は「買は
れたる者」としてのクリスチヤン即ち受膏者のみ
に適用する。此の聖句は悪しき者をも含む人
類の全部が「買はれたる者」であるといふ事を
意味してゐない。「買ひ取られたる奴隷が其の主
人の命に服従しないから」と云つて其の奴隷は
自由を與へられて解放されるであらうか。昔、埃
及に於て人々がヨセフとの間に結んだ契約に
注意せよ。其の時埃及人は先づヨセフに來て
パロ(埃及王のこと)の代表者なるヨセフの前に
己等が買ひ取られん事を願つた。此の事は、キ

10

リネスト・イエスの未だ己等の買ひ取らぬ人事を求むる人々が買ひ取らぬ事を豫示する一の豫言的模範である。(創世記四十七章十九-廿三節)。キリスト・イエスの體の成員となる者は、先づ初めにキリスト・イエスに未だ、主イエスと父なるエホバの聖意は何事をも之を行ふ事を約束するものである。其の時にキリスト・イエスの買價は彼等の上の適用を以て、彼等はキリスト・イエスの所有に歸し、最早己等自身のものではなくなるのである。斯くして彼等は主イエスの僕即ち奴隸となり、爾後神とエホバとキリスト・イエスの聖意をなし、主の御命令に服従するの義務を負ふこととなる。彼等は己等の意志に逆らつて買ひ取らぬのではなくして、彼等は自ら求めて買ひ取らぬのである。エホバの方便は常に絶對不変である。

人が神によつて召されて、天界の靈者としての生命を興へられやうとも、若しくは地上に人間としての生命を許されやうとも其の何れにしても彼が買ひ取らぬ順序は同一である。次の聖句は「小さな群れに屬する者に対して發せられたる。召されて主に在る奴隸は、主に屬する自主なる者なり。此の如く召されて自主なる者はキリストの奴隸なり。汝等は價を以て買ひ取らぬ者なり。人の奴隸となる勿れ」(コリント前書七章廿二、廿三節)。之等の者は、彼等が神とエホバの聖意をなすべく先づ己等自身を主に獻けざる以前に召されなかつた。然る後に買價即ち贖價の効力は彼等の上に働かざるが、彼等は買ひ取らぬ、主は彼等の所有主となり給ふのである。斯くして主に身許容れられぬ時に彼等は主の奴隸となる。何故なれば、彼等は自ら進んで主の示し給へる條件によつて己等の買ひ取らぬ事を承諾したからである。彼等は己等自身を主に賣り渡したものである。(列王紀上廿二章廿、廿五節)。

「惡しき者等は買ひ取らぬ。昔、民(イスラエルの民)の中に偽豫言者ありき。其の如く汝等(クリスチヤン)の中にも偽の師出でん。彼等は滅亡に至る異端を傳へ、且己を贖ふ主を主とせしめて、速かなる滅亡を自ら取らんし」(ペテロ後書二章一節)。斯かる者は初めに買ひ取らぬも、後に惡しき者と化し、主及び己等を買ひ取らぬ主の血の價値を不承認する自主なる者なり。此の如く召されて自主なる者はキリストの奴隸なり。汝等は價を以て買ひ取らぬ者なり。人の奴隸となる勿れ」(コリント前書七章廿二、廿三節)。之等の者は、彼等が神とエホバの聖意をなすべく先づ己等自身を主に獻けざる以前に召されなかつた。然る後に買價即ち贖價の効力は彼等の上に働かざるが、彼等は買ひ取らぬ、主は彼等の所有主となり給ふのである。斯くして主に身許容れられぬ時に彼等は主の奴隸となる。何故なれば、彼等は自ら進んで主の示し給へる條件によつて己等の買ひ取らぬ事を承諾したからである。彼等は己等自身を主に賣り渡したものである。彼等は己等自身を主に賣り渡したものである。(列王紀上廿二章廿、廿五節)。

るのである。斯かる者は救の無き事は聖書の明不する所である。(ヘブル書六章四-十節。十章廿六-廿九節)。

聖書は又、キリスト・イエスの血によつて買ひ取らぬ者の中にも信なるクリスチヤン即ちキリストの中にも成育せる眞の意味に於ける「長老」なるものも言ふ。この長老たち新しき歌をうたひ言ひけるは、汝(キリスト・イエス)は此の巻物を取りて、其の封印を解くに堪ふる者なり。そは汝曾て殺され、其の血を以て諸族、諸音、諸民、諸國の中より我等を贖ひて神に歸せしめたり」(黙示録五章九節)。

此の聖句の理由「長老」は適用されない。何故なれば、彼等は神に歸せしめられたる者にして、神に歸せしめられたる者なり。此の聖句は明して、贖價の利益は如何なる者に対してても無條件で與へらるべき事であることを示す。何故なれば、之等の「長老」は此の「諸族、諸國の中」から贖ひ出されたものと示してあるからである。

キリストの「體」の成員が贖ひ出されたる者なる事は此の聖句に見ても明らかである。彼等が新しき歌を寶座の前及び四つの活物

と長老たちの前に歌ふ。此の歌は贖はるる事を得て地より来れる十四萬四千人の外は、字を得ることなし。彼等は婦(惡魔の組織)なる大淫婦(バビロン)と交はりて其の身を汚さる處にあり。且羔羊の行く処何処にても之に隨ふ。彼等は人の中より贖ひ出されたる者にして神と羔羊に獻げし初めの果なり」(黙示録十四章三、四節)。

之等の者が「人の中より贖ひ出されたる者である」といふ此の事は、即ち人類の全部が無條件に、而して自動的贖はるる者に非ざる事を示してある。此の如く示されたるキリストの「體」の成員は、先づ最初に神とエホバの聖意をなすべく己等自身を神に獻げたる。此の故に彼等は己等の買ひ取らぬ人事を贖ひ取らぬのである。神の御目的と此の御準備は無差別に人間の全部を贖はんとするのではなくして、神に贖はるる者は、先づ最初に神とキリスト・イエスを信じ、然る後に神とエホバの聖意をなすべく己等自身を神に獻げたる者である。それのみならずキリストの「體」の成員は神とキリストに獻げたる「初めの果」である。此の事は、之等の者以外にも

に正しく、此の「すくひ」は昔イスラエル人が埃及から救ひ出されたる時の「救ひ」と同様のものである。(出埃及記六章六節、十五章十三節、詩篇六篇九十一節)。それと共にキリスト・イエスの之等追隨者は悪魔の組織制度即ちパピロンのから解放されてゐるのである。一九一八年以後神の組織制度の遺残者は、主の聖手によつて悪魔の組織制度から解放されて救ひ出されたのである。(詩篇百七篇二、三節。イザヤ書五十三章九十一節。エレミヤ記三十三章十一、十二節。即ちイエス・キリストを信するに由りて、其の義を神に凡ての信者賜ひて區別なし。それは人皆既に罪を犯したれば神より救ひを授けらるるに足らず、唯キリスト・イエスの贖ひによりて神の恩を授け、功なくして義とせらるる。なり。羅馬書三章廿二、廿四節)。此処にも亦、「贖ひ」はキリストを信する者のみに適用されてゐるのである。之等信する者は其の結果として義とせらるる事が明示されてある。之等の者は罪と死の囚徒より解放された者であつて、此の解放は他の者には及ばないものである。

此の Apolytrōsis の意味は「救はれる」と訳されてゐる。唯之等の者(ヨナダ級即ち他の羊級の者)のみならず聖霊の初めて結ばる恩を有する我等も自ら心の中を勤めて子とならん事即ち我等の體(軍數)の救ひを以人事を待つ(ローマ書八章廿三節)。此の「我等」の體の「體」の字は單數であるが、之はキリストの「體」の全成員なる十四萬四千人の者を意味し、その「首」なるキリスト・イエスと共に「贖ひ」即ち「救ひ」を経験する所の者等である。此の「救ひ」の外形的顯示は、地上に在る忠信者が一九一八年に悪魔の組織制度から救ひ出された事によつて行はれた。彼等は此の一九一八年まで悪魔の組織制度の中に「俘囚」として居たのである。此の年に主イエスは神の宮に臨みて忠信者を御許に集め給ふたのである。キリスト・イエスにある者のみに就て又斯く記さる、**「イエスは神に立てられて、我等の智慧、また義、また聖、また贖ひとを賜は給へり」**(コリント前書一章三節)。此の聖句が、キリスト・イエスを通じて與へられる神の救の御準備を排斥拒絶する者に適用されざるは勿論である。

此の Apolytrōsis の意味は「救はれる」と訳されてゐる。唯之等の者(ヨナダ級即ち他の羊級の者)のみならず聖霊の初めて結ばる恩を有する我等も自ら心の中を勤めて子とならん事即ち我等の體(軍數)の救ひを以人事を待つ(ローマ書八章廿三節)。此の「我等」の體の「體」の字は單數であるが、之はキリストの「體」の全成員なる十四萬四千人の者を意味し、その「首」なるキリスト・イエスと共に「贖ひ」即ち「救ひ」を経験する所の者等である。此の「救ひ」の外形的顯示は、地上に在る忠信者が一九一八年に悪魔の組織制度から救ひ出された事によつて行はれた。彼等は此の一九一八年まで悪魔の組織制度の中に「俘囚」として居たのである。此の年に主イエスは神の宮に臨みて忠信者を御許に集め給ふたのである。キリスト・イエスを通じて與へられる神の救の御準備を排斥拒絶する者に適用されざるは勿論である。

此の Apolytrōsis の意味は「救はれる」と訳されてゐる。唯之等の者(ヨナダ級即ち他の羊級の者)のみならず聖霊の初めて結ばる恩を有する我等も自ら心の中を勤めて子とならん事即ち我等の體(軍數)の救ひを以人事を待つ(ローマ書八章廿三節)。此の「我等」の體の「體」の字は單數であるが、之はキリストの「體」の全成員なる十四萬四千人の者を意味し、その「首」なるキリスト・イエスと共に「贖ひ」即ち「救ひ」を経験する所の者等である。此の「救ひ」の外形的顯示は、地上に在る忠信者が一九一八年に悪魔の組織制度から救ひ出された事によつて行はれた。彼等は此の一九一八年まで悪魔の組織制度の中に「俘囚」として居たのである。此の年に主イエスは神の宮に臨みて忠信者を御許に集め給ふたのである。キリスト・イエスを通じて與へられる神の救の御準備を排斥拒絶する者に適用されざるは勿論である。

を映へんがためなり也(改訳マタイ傳廿七章廿七節、廿八節、マコ傳十章四十四、四十五節)。此の *lytron* の字は「代償」、「代償」、「の爲に」等を意味す。イエスは己が生命を多くの人の爲に贖價として與へられた。イエスは之等の者のために、彼等が神の設け給ふ救の方則に服従一致するといふ事を條件として、彼等のために完全なる生命権を買ひ與へられたのである。イエスが意識的悪人を救ふために其の生命を與ふべく、未だ死なないう事は勿論である。成る程ロマ書五章八、十節に、我等が未だ敵であつた時にキリストが我等のため死に給ふたと記してゐる事は事実である。即ち「然れどもキリストは我等の尚罪人を其の愛を顯はし給ふ」。若し神は之によりて其の愛を顯はし給ふ。若し我等敵たりし時に、其の子の死によりて神に和解を得たならんは、況て和解を得たる今其の生けるに類りて救はるゝことを得ざらんや。此れは「我等」として示されたるの別れ地、上人類の全部を意味するものではなくして、之は「召を蒙りて聖徒となれる者」を意味してゐるのである。(ロマ書一章七節)。

テモテ前書はテモテに宛てたる書簡である。此のテモテは、神の聖意をなす事を既に契約せる者等を救へるための任務を帯びて遣はされたのである。之等の者の中にエホバの聖名のために此の世より特選せられたる者の合はしめてある事、勿論である。使徒パウロの此れに言ふところを約言すると即ち斯うである。「神は人を偏り視給はなす。故に全部の人々が救はれて、真理の知識にまじり、唯一の神の任す事と、此の神と人々との間に唯一の中保として人キリストイエスの在りし事、而して此のイエスは神を祀むることをその全部の人々のための贖價として御自身を與へ給ふる事を學び知る事は、即ち神エホバの聖意であること。キリストイエスは神の聖意をなすべく先づ契約せる者のために中保となり給ふ。以上列挙せる諸聖句は共に一致して、イエスの贖價は、之を好むと好まざるに拘らず如何なる人にも絶対無條件で其の價値を與へらるゝと云ふのでなくして、之は先づ正義を求めて神エホバを信じ、エホバが唯一の全能の神に在りし事とキリストイエスが救の道である事を確信して、自ら進んで神の聖意をなすべく契

約せる者のみ映へらるる事を明示してゐるのである。此の中保なるキリスト、イエスなくしては何人も神エホバと和解する事は出来ぬ。イエスは御自身の血即ち生命を以て人類を贖ひ取り給ふた。そして此のイエスは、自ら進入を救はる人等を望む者のみを罪の不完全なる状態の下より解放し給ふ。

神エホバはアダムの子孫である罪人に對してその御憐憫を示し給ふた。之を即ち神の御仁慈の結果である。故に聖書は示す、「神は其の生み給へる独子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に滅ぶることなくして、永久の生命を受けしめんが爲なり也(ヨハネ傳三章十六節)。キリスト、イエスを信する者ののみが滅亡し救はれるのである。神の其の子を世に遣はし給へるは、世を審判かんと非ず。彼は申りて世を救はんが爲なり也(ヨハネ傳三章十七節)。之を即ち人々が救はるる事を示め給ふ神の御憐憫の顯示である。然し之は人が自ら欲すると不口と拘らず鬼は角、全部が救はれるといふ事を意味するのではない。人は贖價なくして救はれない。何故ならんは

彼はアダムの罪を遺傳せる罪人であり、而して罪人全部の上には神の怒り即ち神の正しき審判による斷罪の判決が降つてゐるからである。神は不完全なる者を承認し給はず。此の神はその御仁慈を行はして、イエスを以て人々を買ひ取らしむるの方便を準備し給ふ。人が神とイエスキリストを信じて、其の信仰を實行する時に、彼は罪の囚はれより解放され、神に對して個人的にその貞節を立證する機会を與へらる。彼はその事をなす時にイエスキリストを通じて生命への救を得るのである。故に聖書は明示す、「人々は子を蒙りて萬物を其の手に授けたり。子を信する者は限りなき生命を得、子に從はざる者は生命を見ざる事を得じ。且つ神の怒りの上に留まらん也(ヨハネ傳三章三六節)。

人はキリスト、イエスの贖價の價値による以外の神の正しき刑罰である。永久の死滅より免がれること行出来ぬ。此の故に贖價の恩恵は如何なる人に對しても無條件で與へられるといふ救は絶対非聖書的である。

「贖價」とは人類を買ひ取るための備へられたる貴重なる價値であつて、之は完全なる人ア

ダムが己自身から取り上げられ、而して己が全子孫の興へ得たりしものに全く匹敵する価値である。「罪祭」とは、此の「買價」即ち贖價の価値を神エホバに提出して支拂ふことを謂ふ。イエスは地上で死んだ。イエスの生命の血は贖價として注ぎ出された。神はイエスを霊者として死より甦らして天に昇らせ、神の御目的を執行する全権能をイエスに與へ給ふた。神性の大靈者キリスト・イエスは天に於て此の「贖價」即ち己が人間としての生命権を罪のための祭物として神エホバに提出し給ふた。之を即ち罪祭である。「贖ふ」といふ行為の中には、その買價即ち贖價を準備する事と、その買價を提出即ち支拂ふことの全部を合弁してゐる。此の買價を準備して、その血を支拂ふ事の全部は、神エホバの聖意の一致服従せるイエス・キリストのみによつて完了されたのである。此の故に主イエスのみが此の事を行はれたのであつて、その「體」の成員は此の事には全く無関係である。

昔、荒野の幕屋で行はれたる「贖罪の日」に於ける豫言的模範行、此の結論の正当なる事を全的に立證してゐる。人イエスの模範である。此の「贖罪の日」は、幕屋の庭の中に携へ来られて、其の地上を象徴した。此の模範に於てイエスは祭司長はその牲牛の血を、天を象徴する「至聖」の中に携へ入り、キリスト・イエスの生命を象徴する其の血を其処に注いだ。此の豫言的模範の此の部分の豫言の成就に於て、大祭司長キリスト・イエスは實際の天に昇り、其の「贖價」即ち己が人間としての生命権を神エホバに支拂はれたのである。模範に於て、此の血は祭司長によつて「贖罪所」の上の七度注がれた。「七」の数は天界に於ける全部又は完全を象徴す。此の身は此の血即ちイエス御自身の生命の血が天に於て完全な注がれた事を意味するのであつて、即ちイエスは人類のためにその「買價」の全部を支拂ふことを完了されたといふ事を示してゐるのである。(レビ記第十六章を見よ)。此の模範に於て祭司長は單身「至聖」の中に入り、他の者の彼と共に入る事を許さなかつた。

ることなし。これ己と民の過失の爲に獻ぐるなり(ヘブル書九章七節)。「彼(祭司長)が聖所に於て贖罪をなさんと入りたる時は、その自己と己の家族(祭司級の者)と、イスラエルの全會衆のために贖罪を行つて出づるまでは、何人も集會の幕屋の中に居るべからず(レビ記十六章十七節)」。その如く実仰に於て大祭司長キリスト・イエスは其の人間としての生命の價值即ち「買價」を、神の選び給ふ王族及び凡人の罪のために提出されたのである。(ヘブル書九章十七、廿四節)。

式に於ても罪祭に參與するといふ事を絶対に示してゐない。此の旨意なる「贖價」即ち「買價」は人イエスの生命の血のみであつて、之が罪祭として提出されて支拂はれたのである。然らば何故に「エホバの爲の山羊」が祭物として屠られて其の血が注がれたのであらうか。「エホバの爲の山羊」の血が、牲牛の血によつてなされたと同様は「至聖」の中に携へ入れられて注がれたる事である。模範に於て、山羊はそれ自身が己を贖罪の祭物としてなしたのでなく、之は祭司長によつてなされたのである。之の實仰に於て、人間は一人として己自身自ら祭物となるのではなくして、大祭司長なる主イエス自ら此の祭物をなし給ふのである。「エホバの爲の山羊」が祭物となり、之の血が注がれる事の意義は即ち斯うである。「天の召召を蒙りたる人々は皆彼等が天に於てキリスト・イエスの榮光に參加する前後的條件として先づキリスト・イエスの上に立つる誹謗を共に受け、イエスと共に苦しみ、イエスと共に死ななければならぬ事となつてゐる。之に就て使徒は靈感の下に斯く言ふ。『今

われ洗等のために受くる苦しみ喜び、又わが肉體をもてキリストの體即ち教会のために其の患難の助けたる所を補ふらば(コライ書二章廿四節)。「此処に信すべき話あり。我等若し彼と共に死なば彼と共に生くべし。我等若し忍ばば彼と共に王となるべし。我等若し彼を知らずと言はば、彼も我等を知らずと言はんらば(テモテ後書二章十一、十二節)。「洗等の口をさいたるは之がためなり。そはキリストの跡に隨はよめんとて模範を洗等の遺し給へばなり(マテロ福音二章廿二節)。此の模範に於て「アホバの爲の山羊」は、靈によつて生れたる者等を代表した。之等の者は、彼等が神の國に於てキリストイエスに参喚し、神性の靈者とてイエスキリストと共に支配の大權に参加せんためには、先づ人間として死ななければならぬのであつて、即ち彼等は死に至るまで忠信でなければならぬ。洗將に受け入るる苦しみを恐るゝ勿れ。悪魔まさには洗等の中の者を牢獄に入れ、洗等を試みんとす。洗等十日の間患難を受くべし。洗死に至るまで忠信なれ、然らば我生命の冠を洗に與へんら(黙示録二章十節)。「皆生きてキリストと

共に千年の間王となれり(黙示録二章廿四節)。以下の結論は首尾一貫してゐる。即ち神は神の子キリスト・イエスに由つて救を準備し給ふた。洗されたる人イエスの血は罪人のためのも、買價である。此の「買價」即ち「贖價」はアダムの己の子孫のために失つた所の全部を買取つた。此の「買價」は主イエスキリストを信する者等のための罪祭として天に於てアホバの聖體に提出されて支拂はれた。此の聖體の全部は、アホバの聖意に服従せるキリスト・イエスに由つて行はれた。此の贖價を支拂つたイエスキリストは全人類の所有者である。而して此の聖體を信じて神とキリストに服従する者の全部が此の贖價の利益に與かるのである。永久の生命とは、我等の主イエスキリストに由つて賜はる神アホバの賜物である。何故なれば救は神アホバに屬し、キリスト・イエスは此の救を傳達する爲に用ひらるるアホバの聖體であるからである。此の外に永久の生命を得るの道は純無である。人は神アホバと主イエスキリストを信じ、神の聖意をたすべく絶対無條件の献身を以て此の救を願ひ求めざる限り何人も永久の生命を得ることには絶対に不可能である。(マテ、一九三九年五月十五日)

390
72

(不許複製)

昭和十四年六月十三日印刷總本
昭和十四年六月十六日發行
〔非賣品〕
(三百五十部限定版)

著作發行
發行所
印刷所

東京市杉並区東大塚四ノ五八
東京市杉並区東大塚四ノ五八
東京市杉並区東大塚四ノ五八

明石順三
燈臺社
燈臺社印刷部

終

